

真のトラバースを
横尾義貫 名誉教授 インタビュー
Toward True Traverse

— Interview with Dr. Yoshitura Yokoo (Prof. Emeritus of Kyoto Univ.) —

聞き手 布野 修司
古阪 秀三
大崎 純

—: こんど京都大学の建築系教室を中心として『TRAVERSE: 新建築学研究』を発行しようということになりました。かつての『建築学研究』の志を引き継ごうと思っております。横尾先生には今後継続的にいろいろなこととお聞きしようと思っておりますが、まずはどうのことを考えていったらいいのか、『TRAVERSE: 新建築学研究』に期待すること、あるいは最近お考えになっていることとお聞かせ願えればと思います。

『建築学研究』創刊の頃の京都大学建築学教室周辺はどうだったんでしょう。先生が京大に入学されたのはいつのことになりますか。

横尾: 昭和 10 年です。

—: 『建築学研究』は昭和 2 年創刊ですので、先生が京大に入学された昭和 10 年にはすでに発行されていたわけですが、先生の学生の頃はどんな雰囲気だったんですか。

横尾: 学生時代は『建築学研究』があるってことを知ってるぐらいでしたね。戦争気構えの時代でした。

□ 逗子から京都へ: 絵は割とうまかった

—: そもそもどうして西（京大）に来ようと思われたんですか？

横尾: 東大の試験勉強したくなかったからかな(笑)。

—: え、そんな雰囲気があったんですか？

横尾: ほかに人はムキになって試験勉強やっていたけど、僕は勉強するのがいやでね。簡単にいえばそういうことです。ほかに理由といえない。京都に知り合いがいたわけでもない。なぜでしょうね？ 高校は静岡。それから生まれは九州佐賀。小学校 1 年まで佐賀で、小学校 2 年から神奈川の逗子。そうとうな歳まで家の中では九州弁でしゃべってましたからね。京都ってなんで思ったんだろうなあ？

—: 逗子から静岡高校というのも珍しくないですか？

横尾: 必ずしもそうではないよ。逗子開成っていう中学は、東京の開成中学と経営者が同じで、昔、第二開成っていっていました。逗子開成はね、東京に居にくくなった子供とか、少し体の弱いお金持ちのお坊っちゃんとか、それから土地の人間とが入り混じって、のんびりした学校でね。それから、校長先生が海軍だったということから、海軍スタイルの教育でね。うちもたまたま親父が海軍だったもんだから、その友人が経営している開成へ行くということになった。

逗子開成の中では秀才だけど、自分のレベルがさっぱり分からない。ところが逗子開成っていうのはおもしろい中学で、東大の学生でありながら逗子開成の先生をしていた人もいた。それともうひとり、海軍は将官になると恩給で喰えるんだが、佐官（大佐以下）だと恩給ではちょっと喰えないんでしょうか、それで教師の免状をもった海軍大佐の先生方がいた。おもしろい教員構成でね。

僕は誰からもかわいがってもらったんだけど、英語も数学も 1 年分ぐらい遅れててね、よその学校に比べてのんびりやっているもんだから。そんな理由で、神田で土曜と日曜に行われている「日土講習会」というのに行ったら、はじめは成績が悪かったんだけど、だんだん成績があがってきて、「俺も結構やれるな」という

自信がついた。勧められて一高を中学4年で受けたけど、見事落ちた。それで5年のときは静高受けて、もう一つ早稲田を受けようと思った。しかし、早稲田の試験の日に静高の発表があったから、結局早稲田は受けずに静岡に行った。それが昭和7年。

——：建築をやるということは、いつどうして決められたんですか？

横尾：僕の兄が逗子開成で剣道のキャプテンやってたんだけど、絵がうまかった。兄は、東大の学生で先生をしていた方にすすめられて一高を目指した。それで剣道やりながら猛勉強してたらとうとう倒れてしまった。それで療養生活を数年続けるわけだけど、治りかけてきた頃に絵をやるというって、絵に関係する本や美術全集をこたま買込んでいた。その美術全集ってのをふと見ると建築に関するものがあったって、それを見てたのがひとつの影響だったと思うね。

——：不躰に聞きますけど、絵はどのくらいの腕だったんですか？

横尾：絵はわりにうまかった(笑)。大学のときは絵画部だったが、その頃の絵は1つしか残っていない。大学卒業後海軍へ就職して佐世保まで絵の道具を持っていったけど、佐世保は軍港で要塞地帯なのでスケッチできないということもあって、あまり描かなくなった。

——：油絵ですか？

横尾：そうです。それで絵が空回っちゃって、後の掃除が面倒くさくて性分に合わないということもあって、やめちゃった。あと絵は学生のときに描いた絵がいくつかあったけど、全部どっかいっちゃった。京大へ戻った頃は絵を描く雰囲気時代じゃなかったんだ。戦争がすんだときに、ワン-デイ・エクササイズっていうのがあってね、それは建築の課題を出して、棚橋さんも西山さんも僕もみんな、派出所とか交番とかいう題で描きました。それからたまにはスケッチ旅行もやっていましたね。

——：それは教室全体で、ですか？

横尾：いや、スケッチが好きな人たちだけで。工芸繊維大の石原正雄君もいたね。扇田 信君なんかもいたんじゃないかな。そんな時代がちょっと戦争の後あって。それから僕は全然絵を描いていないんだよ。唯一の絵っていうところに自画像が残っている(退官記念文集「建築構造随想」にある自画像)。

□学生時代：課題をこなすのが楽しくてしょうがないという時期があった

——：どんな学生時代だったんですか？

横尾：古建築を見るための奈良旅行や日光旅行に藤原義一先生、棚橋 諒先生と行きましたが、これは非常に楽しかったね。日光は天沼俊一先生も一緒に、東照宮や二荒山神社を見学し、墓股の実測をしました。

——：今年(1999年)からそのような見学旅行が復活したんですよ。日帰りですけどね。

横尾：いいね。よかったね。

——：何日ぐらいの旅行だったんですか？

横尾：一週間。これまた実に楽しい思い出でしたね。それをやったのは僕らのクラスでおしまいじゃないかな。経費は自己負担だったでしょう。

——：当時はひとクラス15人くらいですから、すぐ親しくなりますね。

横尾：それはもう、学年の上も下も親しくなって。それで、卒業設計っていうと、製図室ひとクラス15人で1フロアだからぜいたくな話ですよ。そこにみんなで金出し合って蓄音機とレコードを買って、そのころの流行歌とシャンソンを聞いて、覚えたりしましたね。

——：先生は語学は何語を選択されたのですか？

横尾：僕は高校ではドイツ語。日仏(会館)でフランス語を少々。製図室で流行歌やシャンソンを覚えた。そこへ時々現れたのが軍服姿の西山卯三陸軍少尉でした。徹夜で先輩の卒業設計を手伝っているときに来て、先生自ら手直しして下されたが、強烈な描き方で、はらはらするほどだった。

——：西山先生は横尾先生の五つぐらい上ですね？

横尾：年齢ではそれぐらいでしょう。卒業年次でいえば西山さんは昭和7年で、だいぶ上です。だから、卒計で接点があったんだよ。先生の同級には、戦時中に講師として鈴木義孝さんがいたかな。西山さんは設計を夜な夜

なやってきて見てくれたということで非常に懐かしいね。

——：増田友也先生とは同期なんですよ。増田先生は設計という点ではどうだったんですか？

横尾：ぼくは一年休んだあと、卒業の前の年の夏ごろ溜まっていた専門をやっていたときにちょっと設計が分かった気がしたんだけど、課題をこなすのが楽しくてしょうがないという時期があった。増田も何かで一年休んでいたな。

——：恋愛(笑)？

横尾：(笑)色々忙しくてね。彼と同じ下宿にいたんだよ。

——：どの辺りですか？

横尾：田中の北白川なんとか荘っていうところだよ。それで彼(増田)は「えっ？」という所はあったけど、

——：抜群というわけではなかったのですか？

横尾：いや、建築的感覚はあったんだろう。絵は、絵としては上手くなかったけど(笑)。でも増田は建築家になろうと思っていたようだね。焼き物なんかもよく知っていた。あと僕のクラスで設計が好きだった奴は…僕がやってたかもしれない(笑)。だけど設計というのは、貧乏性ではダメなんだよ。やっぱり人のお金を使うのを何とも思わないような人でないと。僕は何か悪いような気がして、だから向かないんだよ。

——：先生の学年で一番設計ができた人というと？

横尾：増田君のほかには、島田家弘君だろうか。

□昭和10年の建築学教室

——：先生が入られた時の教室の構成はどうだったんでしょうか。

横尾：構造は坂 静雄先生と棚橋先生、デザインと環境では、教授に藤井厚二、森田慶一先生、助教授に伊東恒治、横山尊雄先生だったでしょうか。武田先生は僕が入ってきた時はご健在で、名誉教授でおられた。そして、建築史では、天沼先生は途中で亡くなられて、村田治郎教授。一年長く在学したので、両先生に師事した。工芸繊維大の教授になられた藤原義一先生が講師。あと非常勤では、安井武雄先生とか、滝沢真弓さんとか。

——：学生時代一番印象深かった先生と講義はなんですか？

横尾：それぞれおもしろかったと思うけどもね。当時はデザインの講義なんかおもしろくなかった。まあ森田先生の建築論なんて一番ねむくていけなかったな(笑)。

——：理屈っぽい？

横尾：まあ建築論なんて当たり前のことをいうようなことだからね、そもそも。まあ後から読むとおもしろいんですね。

——：ウィトルヴィウスの本を書かれた時代ですよ。

横尾：そう、それは知っていますけどね。だけドラテン語みたいなのがポコポコでてきて、なんか分かったような分からなかったような。あと天沼先生が日本建築史で、村田先生からは西洋建築史を習ったね。

——：東洋が専門の村田先生が西洋を教えられえたんですか？

横尾：ちょうど外国から帰ってこられた頃で、西洋建築史といっても様式論で、ギリシャの黄金分割とかプロポーションとか、ああいうのをやっていましたね。おもしろいなと思ってね。

——：村田先生の学位論文はすごいですね。東洋建築系統史論といって、その1、その2、その3と『建築雑誌』で連載されて、それが学位論文になっているんです。満州におられたので東北アジアにもものすごい強いんですけど、蒙古のパオの原型がどうとか、ドーム構造がどこでできて、アーチがどこでできてとか、考察されているんです。

横尾：おもしろい！

——：おもしろいと思います。アーチとか、ドームだけでなく、高床とか校倉の起源の議論もある。

横尾：それはおもしろいだろうなあ。その話は聞かなかったけど、ギリシャの曲線の話をした。今日たまたま、社寺建築をやっている北尾嘉弘君から、規矩術の話聞いていたんだけど、彼は村田先生から規矩術やること

を勧められたと言っていた。なるほど、ギリシアの建築の幾何学といったものがつながっているのではないかなと思ったんだよ。

——：規矩術もちろん関係しますが、学位論文では、原型がどうか、どのようにして成立するかという点に力点があります。例えばストゥーパというものがあるって、何であれが五重の塔になるんだろうということです。伽藍配置には我々が四天王寺式や法隆寺式と呼んでいる様々なタイプがあるのですが、ではインドではそれが一体どこにあるのか、ということは誰も説明していないんですよ。先生はそれを解き明かそうとされている。そういう講義じゃなかったんですか。

横尾：いや。いきなりそういう話ではできないから。建築史なら、斗拱
るくらいだなあ。

——：三手先なんて学生に聞いても全然分からないかもしれない。構造の先生でも分からないかもしれない。この間、日本建築史のツアーにいった時、山岸先生が一生懸命説明してくれました。現場で聞くとよくわかる。でも、六四掛けなんて、それを力学的に解け、と言われるとどうでしょう。割り方だから、生産的な話もあって、それと力学的な話は繋がっている。構造も歴史も共通の議論をしたいですね。

□戦前の『建築学研究』

——：先生に昔のことを思い出していただくために、実際に本を手元において、お話をうかがいたいと思います。まず、『建築学教室六十年史』の向井正也先生の記事（『京大建築会会報』Vol. 44 の記事を転載したもの）を参考に、少し刊行の歴史を整理してみます。最初は月刊で、1 集、2 集としてまとめられているのは一年単位です。創刊号から 9 号までは星野書店。10 号から 68 号までは建築学研究会が発行。69 号から 100 号（昭和 16 年 5 月）までは会費が集まらないので、日本建築協会と合体。101 号から終戦の 129 号まで建築学研究会の直接の発行で、版が小さくなり A5 版となっています。戦後は昭和 21 年 8 月に 130 号が出て、156 号まで続いています。

武田先生は、創刊号には祝辞を書いておられますが、『建築学研究』を「手習い草紙」と称して発行には必ずしも積極的ではなかったということですが…

横尾：そりゃそのようなこともあるでしょう。『建築学研究』は若い人中心だったから。教官では森田先生が比較的若かったということもあり、協力的だったでしょう。

——：創刊の頃には森田先生と藤井先生が書いておられますね。

横尾：武田先生と藤井先生にはジェネレーションのギャップがあるからね。あと構造では三浦先生が関係しておられた。三浦先生はよく知られていないけど大変な文化人で、棚橋先生も完全に私淑されていました。三浦先生はドイツでかなり仕事をされて、奥さんがドイツ人だった。僕は直接お目にかかったことはありません。また、記事が少ないときには、東畑先生が翻訳を埋めていたということを聞きました。この頃の記事に「印度旅行記」というのもありますね。

——：著者の「八戸成蟲楼」は天沼先生のペンネームです。「やっといまごろ（イマーゴロ）」と読むそうです。

横尾：『建築学研究』の記事を編集しなおすと面白いのではないかな。西山先生や増田先生は弟子が多いからスクールがあって業績がまとまって残されているんだけど、天沼先生については「天沼俊一に関する研究」というのはないね。

——：横尾先生が『建築学研究』の編集委員になられたのは、昭和 17 年 5 月発行の 107 号からですね。

横尾：僕が京大に来たのは昭和 17 年 2 月だから、その頃から出版に関わったと思います。この頃は印刷なんかもしっかりしていて、論文クラスのしっかりしたものが掲載されているね。森田先生は一貫してウィトルヴィウス。

——：横尾先生が入られた頃は棚橋先生が編集されて、原稿も構造が中心だったですね。とくに棚橋先生はほとんど毎回書いておられますね。

横尾：棚橋先生も若かったから。計画系では、藤原義一先生もおられました。藤原先生は、京大の卒業生で、旧制高校からではなかったと思います。天沼先生のところの講師で、美術工芸史を教えておられた。棚橋先生と藤原先生の旅行に、僕は何度もお供しました。棚橋先生は秀才の誉れ高く、藤原先生は田舎のおじさんという感

じで、なんとも好対照でした。棚橋先生がたばこの包紙に俳句や漢詩を書いたりしました。包紙が残っていれば、いまごろ詩集ができたかな。このころ記事を書いている塩原君は僕の1年後輩で、棚橋先生のところにいました。

——：戦争の影響はあったでしょうか。

横尾：その頃から経済の事情が悪くなって、とくに紙が少なくなり、質が悪くなっていきました。日本建築協会の歴史でよく聞かれるのだけど、学会との統合話があったようですが、その頃は、色々な分野で統制によりいろいろな機関の統合がありました。それらは東京で、トップの間で行なわれ、下の者には関係ありませんでした。いろいろな理由が考えられますが、物質の不足ということもあったのではないかな。この頃は、状況がものすごい勢いで戦争に傾斜しています。

——：この頃は木構造の論文が多いですね。

横尾：鉄がなくなって、陸軍関係では、木構造の大規模構造が多く造られてます。海軍は鉄を持っていたからそれほどでもなかったでしょう。だから、木構造関係の論文は戦争中はよく読まれたと思います。

——：横尾先生はまず翻訳されていますね。

横尾：戦争中では、DINE4114の抄訳です。DINEはドイツの規定DINの改定案で、EはEntwurf（案）の意味です。改定の対象のDIN4114は鉄骨の座屈規定です。モチベーションとしては、棚橋先生が「鉄骨構造は座屈である」といわれたことではなかったかな。訳して非常に勉強になった。座屈規定は、建築構造物以外にも、長柱、アーチ、橋梁にも関係します。全部訳すのは大変なので、抄訳した。

——：この抄訳は一般に読まれたのでしょうか。

横尾：皆さんに役立ったか分らないけど、僕には役立ちました。ドイツのシステムティックな考え方とか。しっかりしたものを翻訳するのはいいと思います。座屈規定を改正するフィロソフィーとかも勉強になりました。学者には役に立ったでしょう。若林先生は読んだと言っておられた。戦後は世の中の進み方が速くてコンピュータが入ってきたものだから、あまり役に立たなくなったかもしれない。土木に転任になったとき、アメリカの規定と比較してみたんだけど、設計方式は国民性が反映されるのではないかな。座屈規定だと細長比をどこまで許すか。

——：執筆者には京大外の人もしらっしゃいましたか？

横尾：京大外の人もしましたが、だいたい京大関係の人です。

——：南方関係の論文もありますね。「南方建築序説」、「熱帯馴化に関する生理学的研究」とか。それから、「バタビヤの建築施設概観」という資料は森田先生が書かれたようですね。

横尾：森田先生が実際に南方にが行かれたかどうかは知りません。南方は占領中でどんどん出かけていたから、いかれたかもしれない。

——：村田先生の満州・中国関係の論文や、木割りに関する藤原先生、鈴木先生の論文もありますね。これらは時節に関係ありますか。

横尾：建築史には時節は関係ないでしょう。弾圧されることもないから。

——：当時は横尾先生は原稿を依頼されたりしたのですか。

横尾：計画系は分かりませんが、構造系は棚橋先生が依頼され、藤原先生が編集されたのではないのでしょうか。出版社の理工書院の人がしょっちゅう京大に来ておられました。

——：積算の記事を書いておられる大屋先生はどういう先生ですか。昭和20年卒で、向井先生、扇田先生と同じです。

横尾：大屋君は施設部長だったと思うけどね。

——：戦前の最後の発行は昭和19年9月で、京都府警察の命令により休刊になったそうですが、何か事情をご存知でしょうか。

横尾：僕が兵隊に行った頃で、あまり記憶にありません。

□戦後の『建築学研究』

——：戦後はほとんど西山先生が編集をされたのですか？

横尾：西山先生が軍の施設部の建築課長をされていて、京大構内の官舎におられました。そこへ向井、石原、扇田君らと一緒に僕もお伺いして、再刊の計画をしました。

——：記事は計画中心でしょうか。

横尾：そうだったかもしれないけど、僕も書いています。シエルの関係とか耐震判定とか。それに、構造以外のことで、「セセッション」の紹介を書いて、村田先生に叱られたのを憶えています。「金色燦然たる」と書いたら、「金色じゃないよ君」と言われました。（吉田寅之助「オルブリヒとホフマンとヴァン・ド・ヴェルトー近代建築家の研究 2」）他に、扇田君に「鋼絃コンクリート」の訳をしてもらったところ、その本は、ズデーデン地方の方言で書かれていて、わけのわからないことで有名な本だということがあとで分かりました。

——：「京都大地震略史」は横尾先生が調べて書かれたのですか？

横尾：そうです。その原稿を書いたときは、子の刻とか午の刻とかは1日の24時間を等分するものだと思っていたのだけど、実際は夜明けとかによって移動するようです。だから、記事の中の時間は間違っています。

——：このころから歴史に興味をもたれたのですか？

横尾：その前に鳥取に行ったときからです。地震と地盤の関係を考えているときに、地誌を読むと何かと地盤のことが分かることに気が付きました。そのころから、地震があると地誌を読むことにしました。「京都大地震略史」には、時間の関係以外には間違いはないけど、伊賀上野の地震を加えないといけなかったかもしれない。この記事は、少し変更したものを、防災研の施設部長をしておられた宮川さんと一緒に防災研の報告集に載せています。その後新潟の大地震略史を書きました。僕自身は立派な論文だと思ったのだけど、新潟の人に送ってもあまり反応がなかったね。

——：戦後は内外出版からの発行ですね。

横尾：そうです。担当者は武田さんだったかな。内外出版というのは大雅堂出版から分かれたものだったではないでしょうか。棚橋先生と石原先生が親しかったようです。

——：廃刊の理由は何でしょうか。

横尾：要するに、出版の中心が東京へ移っていったということでしょう。『新建築』の復刊もあったし。『新建築』は西山先生が中心になっていました。僕も匿名で記事を書いていますがお恥ずかしい内容です。西山先生が「山岳都市論」のようなものを書かれた頃です。『新建築』はそもそも関西から起こったんだよ。それが東京へ移っていったんだけど、吉岡さんという人が、再スタートを西山先生に頼みに来たんです。廃刊当時の事情は詳しくは覚えていません。

——：『NAU』とか『関西文化連盟』などいろいろな集団が出てきた頃ですね。

横尾：そうですね。『新日本建築家集団 (NAU)』には僕も少し関わっていました。とにかく、書くのに不自由しなくなった時代ですね。

——：終わりのあたり例えば155号あたりに、関野 克先生とか神代雄一郎先生とか、明らかに京大OBでない人が入っていますね。

横尾：たぶん西山先生が頼んだのでしょう。

□大きな議論を：建築の世界が見えるように・・・トラバースは「横働き」のこと

——：今度の『新建築学研究』に期待することとか、エールでもいただければと思うんですけど。

横尾：結構なことですが、採算を考えるのが大変だね。大きなスポンサーがあれば良いかな。

——：今はメディアがいろいろありますので、それほど費用はかからないですね。最近の学会は再分化されているので、横断的な情報をこの建築学教室から発信したいのですが。京大のアイデンティティーのようなもののためでもあります。

横尾：「横働き」のようなものだね。このような本の発刊を提案して、ディスカッションして、活字になるというのは良いのではないかな。企業などいろいろ出版しているけど、学問的に物足りないような気がする。例え

ば、シンポジウムのようなものを開くのも良いでしょう。まず、テーマを決めて、みんなが準備して、ディスカッションして、反省するというように、「前段」、「議論」、「後段」があつて、「起承転」ぐらいがあると、資料として充実するでしょう。「結」は各人が研究して作れば良い。導入はプロジェクトチームですが、議論は誰がしてもいい。

——：先生がテーマを決めるとすると、やはり「法の問題」でしょうか。

横尾：そうですね。今の世の中で、法を守らないでおこうという風潮があるのはどこかおかしいね。でも、法の問題を取り上げるとすると、資料を集めるのが大変だ。それから、「保険の問題」も重要な。

——：とにかく発行してみなければ。発行の意味としては、大学の活動を世の中に公表するというのもあると思います。

横尾：とにかく、最近の学会の議論は細かすぎると思うよ。いや細かい議論はその専門分野でやればいいことで。だけど世界が見えない。建築の世界が見えない。見えるようにしなきゃいけない。

——：個人的に、細かいこともいいけども、京大には、もっとある種の筋のある大きな議論を発表するメディアがあったらいいんじゃないかなと思うんです。

横尾：どういうものをトラバースの中でずっとやっていくかということ、要するに随筆めいてでもいいし論文めいてでもいいけれども、本当にトラバースでなきゃいけないというひとつの方針にしたがうことだと思うね。要するにトラバースでないものを出す分野はたくさんある。いくらでもある。それからもうひとつは既存の学を網羅してやるんだったら、しっかりした文献を読んで欲しい。中身や表現は簡単でもいいけれど、文献を脚注として挙げて欲しいと思う。例えば何かテーマを決めて議論をしたり、対談をしたりというようなものがあっていいんじゃないか。これからテーマを作っていってもいいと思う。必ずしも建築の中でトラバースを組めないときには、土木や他の分野もとり入れる。トラバースということを、ぼくは横働きと言っているんだけれど。「縦社会の横働き」と称するメモもずっと前に書いているんだ。

——：トラバースっていう名称は竹山聖先生が言い出したんだけど、確かにそういう意識があるとおもいます。

横尾：自分の側からばかりではなく、少し立入って、お互いにむこうが思っていることを理解し、考える、要するに弁証法的なものが欲しいですね。弁証法は本来対話法という意味だ。少し時間はかかるでしょう。トラバースとは何だっていうことだけど、単純な横並びっていうのはよくないんだよ。エンサイクロペディアのようなものは多いんだよ。しかし、全体を見渡している人が何人ぐらいいるか。多くの知識が役立っているにすぎない。だからトラバースでやるという課題はいくらでもある。それをチャレンジしていくと、新しいものがでてくるんじゃないの。

——：今はますます細分化されてしまって、全体をみる人がいない。

横尾：要するにトラバース的に、相性の悪い奴を無理にくっつけて、結婚式をあげさせて（笑）、見合い結婚じゃなくて喧嘩結婚みたいなのを。自分の仕事をしながら何か成果をあげさせればどうか。僕は昔から自己流の建築論ともいうべき、力感論と空間論とかをやっていたんだけど。駆出しの頃、美術全集の建築編の写真を眺め、また解説を読んでみると、解説の先生方に好評なものは、何かそこに秩序感がある。それは力の流れとくに重力の流れの感じではないかと思うようになった。それから、増田君が満州から引上げてきて、大学へ来るようになり、増田君と議論しているうちに書き出したのが、自己流の力感論だ。しかしこれは直接増田君には見せてはいない。森田先生にはお見せしたが、当り前のことだとコメントされたと記憶する。私自身いまだにこだわっている。空間論は、しゃべったことはあるが、書いたものはない。力感論と同じように、物理的な事実とわれわれの感じとのかわりを議論するものです。

1999 年 6 月 21 日

(京都：学芸出版社 アティック)

1999 年 11 月 24 日

(京都大学建築系教室会議室)